祝婚歌

皆川博子

祝婚歌

皆川博子

皆川 博子（みながわ ひろこ）
昭和五年京城に生まる。東京女子大英文科中退。
昭和四十八年「アルカディアの夏」で小説現代新人賞を受賞。昭和四十九年「トマト・ゲーム」、五十一年「夏至祭の果て」で直木賞候補となる。
主な著書
「トマト・ゲーム」講談社
「ライダーは闇に消えた」講談社
「水底の祭り」文藝春秋
「夏至祭の果て」講談社

祝婚歌

1977年5月10日　第1刷発行

祝婚歌
著者　皆川博子
発行者　下野博
発行所　株式会社　立風書房
東京都品川区東五反田三―六―六
電話（03）四四七―一一九一
振替口座東京五―七四四九三番
印刷所　信毎書籍印刷
美術版画社
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Hiroko Minagawa 1977 Printed in Japan

目次

疫病船　三
魔術師の指　四五
遠い炎　九三
海の耀き　一三一
祝婚歌　一七三
あとがき　二四〇

装画·装幀　米倉斉加年

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

疫病船

1

暗い事件だった。四十一になる女が、六十一歳の老母を扼殺しようとしたというのである。未遂に終わったのが、せめてもの救いであった。

被告人の宮沢初子は、犯行後、警察に電話して自首している。

係官が駆けつけたときは、一時仮死状態にあった母親はすでに意識をとり戻していた。のどにどす黒く指の痕が残り、「娘に殺される……殺される……」と嗄れた声で泣きわめき、係官にとりすがった。

初子は、殺意のあったことをはっきり表明したので、尊属殺人未遂として起訴された。

弁護人はいらないと初子は、強く拒んだという。

国選弁護人として初子の弁護を担当することになった安達兼太郎は、拘置所の面会室で初子を待っていた。

頭の芯が重く、肩から背筋にかけて、どす黒い疲労がたまっていた。彼は、指に力をいれて首筋を揉んだ。

妻の加代子が、今日一日、平静にもちこたえてくれるだろうか。その不安が、躰の中に重い疲労となってよどんでいた。

昨夜、一晩中加代子は錯乱の発作を起こして荒れた。追いつめられた獣のように部屋の隅にうずくまり、彼が近寄ろうとすると、悲鳴をあげて、手あたり次第に物を投げつけた。

また、入院させなくてはならないだろうか。しかし、入院は、加代子の心の傷をいやすことにはならなかった。ただ、安達が負いきれぬ荷を他人に預け、一時的に日常の暮らしが楽になるというだけのことであった。

平静をとり戻し退院してくると、加代子は、入院させたことで安達を恨み、あの女に会うために私を遠ざけたのだろう、私の留守中にあの女をひき入れて、二人だけでいい思いをしたのだろうと言い、その言葉に誘発されたように、また、錯乱の発作をくり返すのだった。雪子とは別れた、一度も会ってはいない、と安達が辛抱強く説いても、加代子の耳には入らなかった。

彼は、加代子のことを念頭から遠ざけ、彼が引き受けた仕事について考えをまとめようとした。

あまり気の晴れるような仕事ではなかった。被告人に対して先入感を持つまいと思っても、安達は、母親の殺害を試みたという宮沢初子に、不快感を抱かずにはいられなかった。

安達の母は一年前に死亡しているが、彼は、肉親に対する愛着が人一倍強く、ことに、母親を何ものにも代えがたく思っていた。父親を早くに失くし、少年期を、母と弟と三人で躰を寄せあうようにして生きてきた、そのためかもしれない。

どのような理由があるにせよ、母親に害意を持つということは、彼には許しがたかった。

自分が検事であれば、容赦なく初子を糾弾するところだ。しかし、彼は、職業上、初子の側に立って、何とか彼女に有利な弁論を陳べねばならなかった。

初子は、犯行を自首したものの、動機については語ろうとしないということだった。

動機がわからなくては、弁護のしようがない。

こった筋肉をもみほぐそうと、首をまわしているとき、看守に伴われ、宮沢初子が面会室に入ってきた。その顔を一瞥した瞬間、安達は、抜き身の刀剣を間近に見たように、冷やりとしたものを感じた。

それと同時に、――加代子に似ている……と思った。

顔立ちがそれほど似ているわけではなかった。

憔悴しているものの、初子の表情は、しずかだった。

だが、ほんのちょっとしたきっかけで、その表情が、皮を一枚めくるように裏返り、憑依した巫女のような狂おしいものがあらわれそうな気がした。

その物狂いの顔が、加代子に重なった。

「お世話になります」宮沢初子は低い声で言った。視線を安達にむけたまま、「でも、私、弁護はいりません。どんな刑でも受けるつもりでいますから」
「悔悟しているのだね」
悔悟の情著しく、極刑に服する覚悟でいるということは、弁護の上で好材料の一つになると思った。
「いいえ」
思いがけないことに、加代子は、きっぱり首を振った。パーマをかけない髪を断髪にしているのと、贅肉のない躰つきのせいで、遠目には若く見えるが、間近く見ると、瞼が落ちくぼみ、年よりなお老けて見えるほどだった。血色の悪い頬はなめらかで、鞣した羊皮のようにしなやかだった。
この女には、性を感じさせない色気がある——と安達は思った。ひどく矛盾しているが、そうとしか言いようがなかった。
「どんな刑でも甘んじて受けるというのは、後悔しているからだろう」
「いいえ」
たそがれの薄闇に、ひっそり棲息しているような、ものしずかな初子に、安達は、奇妙な連想だが、政治関係の確信犯に似た、したたかなものを感じた。
「あなたは、取調べの係官に、犯行の動機を語ることを拒否しているということだが、私には

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

話してくれるだろうね。母親に手をかけるというのは、たいへんなことだ。自分の立場は、十分に釈明しなくてはね」

「よろしいんです。私、立場をよくしようなどとは思っていませんから」

ふてくされているようには見えなかった。

「しかし、何の理由もなくあのような犯行に及んだとなると、あなたの精神状態が疑わしくなる。精神鑑定は受けたのかね」

「いいえ。私、正気です」

薄い、微笑のような翳が、一瞬、口もとをよぎって消えた。微笑したために、かえって淋しそうな表情になった。その翳りが、安達を捉えた。

安達は、好奇心めいたものを持った。

係官が近所の者から聞きこんだところによれば、初子と母親の間は、これまで、険悪な様子は全く見られないということだった。

母親は、どちらかというと陽性でお喋りな方で、〝がらっ八ですよ〟と評する者もいたという。

初子は陰性で、無口だった。〝おとなしい、静かな人ですよ。どうしてあんな恐ろしいことをしたのか、不思議ですねえ〟近所の人々の証言は、一致していた。

〝お母さんは、だらしないけれど、初子さんは、きれい好きで几帳面な人ですね〟と言う者も

いた。
初子と母のマツは、北十条の、小さい町工場が立ち並ぶあたりにアパートの一室を借りて同居していた。
初子は近所の無認可の保育所で働き、マツは手内職をしていた。暮らしは楽ではないようだった。
狭い一間で、女が二人きりで鼻をつきあわせて暮らしていれば、いくら実の親娘でも、気持のこじれることがいろいろ生じてくるのではないだろうか。
安達は、妻の加代子と、一年前に死亡した母の、何ともやりきれない葛藤を思い浮かべた。
早くに未亡人となり、女手一つで安達とその弟、二人の息子を育て上げた母は、気が強く意地っぱりで、嫁の加代子との間に争いが絶えなかった。
それまでは、息子の前で愚痴一つこぼさなかったのが、腰が痛い、頭が痛い、心臓が苦しい、と安達に訴えるようになった。
私が心臓が苦しいと言っても、加代さんは仮病だと言って、とりあってくれないんだからね。
お母さんにもっとやさしくしてやってくれ、と安達が加代子に注意すると、
やさしくしてほしいのは、私の方だわ。
加代子は、激しく泣いた。
お医者さんだって、お母さんの心臓発作は仮病だって言っているわ。あなたの気をひくため

よ。私はそんなお芝居はできないから、お母さんにどんな意地悪をされても、黙ってがまんしているんだわ。

そのくせ、二人とも見栄っぱりなのか、他人の前では弱みをさらさなかった。いかにも、仲好くやっている嫁姑のようにふるまい、近所の人からも羨ましがられていた。

初子とマツは、実の親娘だし、初子は独り身だから、安達の家とは事情が違うが、近所の人の目には触れない確執が、二人の間にはあったのではないだろうか。

――女というやつは、思いつめると目先が見えなくなるから……。

母と妻のたえ間ない争いの間で揉みしだかれた年月を、安達は、苦い思いで噛みしめ直した。

事務所から帰宅すると、母と妻、二人の女は、かわるがわる安達に、ヒステリックに愚痴をぶちまけた。

安達が加代子に、お母さんは年寄りなんだから、おまえがもう少し辛抱してくれ、家にいるときぐらいはおれをのんびりさせてくれと強く言うと、加代子は押し黙ってしまった。意地になったように、いっさい愚痴は言わなくなったが、内攻した怒りが、全身から発光しているような凄まじい気配をみせた。

母は母で、おまえは、私がじきに死ぬからと、加代さんに言ったんだそうだね、どうせ私は年寄りだ、さっさと死ねばいいと思っているんだろう、と泣いた。

母の口からそのような言葉を聞くのは、安達にはたまらなかった。

彼がほかの女とかくれた生活を持つようになったのも、そこにいる間は、母と妻の葛藤から身をさけることができて、くつろげるからだった。愛人の森雪子は服飾デザイナーとして十分な収入があり、窮屈な結婚など望まず、気楽に情事をたのしんでいた。それだけに、二人の間は長続きした。雪子と過ごす時間は、安達には貴重なものだった。彼は、加代子と離婚し、雪子を妻にする気はなかった。それは、同じ地獄をまたくり返すことだとわかっていたからだ。母と関わりない情人であればこそ、雪子との時は快楽にみちたものであったのだ。

加代子が彼を愛していることもよく承知していた。彼は、母をも妻をも、突き放すことができなかった。

独り身の初子の場合は、訴える相手を持たないだけに、怒りや憎しみは、心の中で、いっそう鮮烈になっていったのではないだろうか。

彼は、自分の身にひきくらべながら、想像をめぐらせた。

初子の犯行の動機について、世間で取り沙汰されていることが、一つだけあった。

彼は、それを信じていなかった。世間の、無責任な興味本位の憶測としか思えなかった。

しかし、彼は、試しにそれを口にしてみた。

「お母さんに殺意を持ったのは、あなたが大金に目がくらんだためという説もあるんだがね」

初子の表情が、ふいに激しく動いた。鋭い閃光が眸に光った。

安達は意外だった。

犯罪実話を売物にしている週刊誌などは、登場人物の名は一応偽名にしながら、露骨に、欲のために娘が母親を殺そうとしたと書きたてていた。

思いもかけぬ大金が、母に贈与されることになった。欲に目がくらんだ。母親が手に入れた大金を、少しでも早く、自分の自由にしたいため……。

だが、そのような記事は、初子が母親を扼殺した後（実際には、母は蘇生したのだが）逃亡しようとも、行為を隠蔽しようともせず、警察に電話して自首した事実を、故意に無視していた。

母親マツの弟、後藤永助は、昭和三十一年、ブラジルに設立されたジャミック移植民会社のトメアスー移住地に移民し、ピメンタ、蔬菜、果実等の栽培に成功し、産を成した。後藤永助は現地で結婚したものの、子供はなく、妻も五年前死亡し、独り身だった。

最近、永助は他界し、遺産が唯一の肉身であるマツに贈られることになったのである。

マツに遺産が入れば初子の生活もうるおうのだし、その全額が（相続税を差し引かれるとしても）いずれは初子の手に渡るのだから、金のためにマツを殺さねばならない理由はなかった。また、もし財産めあてであれば、もっと巧妙な、犯人が初子とはわからない方法をとらなくては無意味であった。殺人犯人とわかれば、相続権は消滅する。

「もちろん、私は、そんなことは信じない。だが、あなたが真相を語らなければ、世間では、欲に目がくらんだと信じてしまうよ。世間の人間は、真実よりは、刺激的な嘘の方を真実と思

いたがる」
初子は、目を上げた。
「そんなふうに言われているんですか、私が欲のために……」
初子は、切れの長い目に青ずんだ光を浮かべ、安達を凝視した。白眼と黒眼の境が、鮮やかにくっきりしていた。
「私が母を……したのは」初子は言った。殺そうとしたという言葉は、口の中にあいまいに消えた。「たしかに、叔父の遺産のためですわ」
「だが、それでは、なぜ……」と安達が言いかけるのをさえぎって、初子は続けた。
「母に遺産を相続させないため。母に、安楽な老後を送らせないため、でした」
安達は、背に悪感が走るのをおぼえた。
それほど、初子の言葉は残酷だった。
「そんなに、お母さんが憎かったのか」
激した声を上げたくなるのを押さえた。
妻を迎えたために、母の晩年が安らかでなかったことを、安達は今もなお辛く思っている。
加代子には酷い姑だったが、安達にとっては、気丈で、しかも、息子にはやさしい母だった。母と共に作り上げた歴史の方が、加代子との絆より、はるかに長く、密接であった。乳離れができないとか、母の軛から逃れられないとか、そんな消極的な女々しい感情ではなかった

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co